新聞に親しみ、新聞を重要な情報源の１つとして学習や自分の生活に活用することができる生徒の育成を目指して

長野県下伊那郡喬木村立喬木中学校　片 桐　安 雄

１．はじめに

本校のある喬木村は、長野県南部、天竜川をはさんで飯田市の東に隣接する人口7,000人程の小さな村である。天竜川河岸から続く低地に阿島地区等の村の中心街があるが、村の大部分は山間地である。本校は生徒数240名ほどの小規模校で、山間地で育ってきただけに生徒は概ね純朴である。こうした山間地の学校、純朴な生徒へも情報化社会の波が確実に押しよせてきており、私生活においても、また、日常の学校生活の中においてもコンピュータやインターネットを活用する場面が増えてきている。昨年度も、総合的な学習の時間や社会科の学習等で多くの生徒がインターネットを利用しての調査活動やコンピュータを活用しての発表活動を行ってきた。おかげで、コンピュータの扱いやインターネットを活用しての調査活動に多くの生徒が習熟することができたが、その一方で、気がかりな生徒のようすも見えてきている。そのうち、最も気がかりな点の１つは、生徒がインターネットを唯一無二の情報源のようにとらえ、調査活動というとすぐにインターネットにとびつきたよってしまい、その他の情報源にはなかなか目を向けることがないということである。インターネットの簡便性、情報量の豊富さ等を考えれば、生徒がそうなってしまうのも首肯できるのであるが、しかし、それ一辺倒では情報収集能力・情報選択能力・情報活用能力等生徒の情報に関わる能力を十分に伸長することは困難ではなかろうかと思われてならない。この度の“NIE”の指定を機に、必要な情報を得たい場合にはインターネットで検索して…というスキルの指導とともに、自分たちの身のまわりには生きた教材である「その道の達人」・体験的な実験・活字媒体等さまざまな有益な情報源があることに気づかせ、それらもインターネットとともに活用していける生徒を育成していきたいと願い、まずは、新聞を重要な情報源として活用していける生徒の育成をテーマに取り組もうと考えた。

２．教師の願い

(1)　実践項目

昨年度は、以下の取り組みを行ってきた。

① “NIE”新聞コーナーの設置
② 喬木村や本校関連の新聞記事紹介
③ 生徒による生徒への新聞記事紹介
④ 理科での新聞の天気図を活用した学習
⑤ 国語科学習での季節新聞(壁新聞)づくり
⑥ 社会科での新聞を活用した授業

(2) “NIE” 新聞コーナーの設置

生徒の行き来が頻繁な廊下の一画に毎日配達されてくる新聞を置いて生徒の自由な閲覧に供するようにした。本校は2、3時間目の業間(15分間)以外の業間の時間は5分間なので、授業と授業の合間にこのコーナーの新聞を読むことは時間的に厳しい面があるが、15分間業間や給食後等のゆとりの得られる時間には、何人か生徒が群がって新聞を読む姿が見られ、新聞に親しむ生徒が少しずつ増えてきているように感じられる。

しかし、正直な所、「置いたからあとはどうぞご勝手に！」といった状態になってしまっている観も否めない。それだけでは不十分なのであろう。新聞に親しめる環境をつくるだけでなく、そのつくった環境へ生徒を誘う手だても考えなくてはなるまい。今、ただ新聞を置くだけでなく、1人でも多くの生徒が置いてある新聞を手にし広げて見るようにし向ける工夫がさらに必要であろうと考えている。たとえば、「今、△△新聞には、□面に○○の特集記事がシリーズで連載されているよ。」等の新聞記事情報を適宜生徒へ伝えていくといった工夫である。今後、検討していきたい。

(3) 喬木村や本校関連の新聞記事紹介

生徒が頻繁に行き来する廊下の掲示板を利用して、本校に届けられる新聞の中で喬木村や喬木中学校の話題の新聞記事を切り抜き、台紙に貼った上で掲示し全校生徒に紹介してきた。これは、そもそもは “NIE” の活動として行われたものではなく、学校長や教頭がなかば個人的に行ってきたものであったが、“NIE” の指定を受けた後には担当係も参加するうちに、自然な形で担当係所管の活動の1つとなったものである。新たに掲示された記事を見つけた生徒たちが「おお、すげえ！」、「あっ、このこと知ってる！」などと言いながら記事に見入っては談笑している姿がこれまでよく見られた。本校での “NIE” 活動について取材していただいた記事も掲示させていただいた。生徒たちのようすから、この活動は、生徒に新聞への関心を持たせるということの他に、愛村心や愛校心を持たせ高める上でも有効な活動であろうと実感している。

いま振り返ってみると、この活動についても以下のようないくつかの反省点が挙げられる。

- 端から時系列的に掲示していくというやり方をしていったので、掲示内容の脈絡や系統性は無視された形となった。たとえば、喬木村の合併問題の記事を「喬木村の合併問題コーナー」というようなスタイルで脈絡をつけながら系統立てて掲示を工夫していけば、生徒にさらに有益な効果をもたらすことなったかも知れない。
- 担当係はただ掲示をするだけで、記事を掲示したことについての生徒へのPRや記事内容を補完するような情報紹介を十分に行ってこなかった。そのために掲示に対する生徒の意識や関心の向けぶりが今ひとつ盛り上がってこなかったように感じられる。

できれば、今後は、これらの反省点を踏まえて、単なる掲示で終始してしまうことなく、どうすれば掲示された記事が生徒に対して有益に生きるのかを念頭に置いて生徒に生きる記事掲示紹介を目指していきたい。

(4) 生徒による生徒への新聞記事紹介

① 社会科授業での生徒による新聞記事紹介

社会科授業の初めの5分間程度、生徒が1時間の授業について1人ずつ輪番で、気になったり興味を抱いた新聞の記事を自分の感想を交えて学級の生徒に紹介させている。当初はスポーツや地元に関係した記事の紹介が多かったが、しだいに政治関係の記事や国際的な問題に関係した記事の紹介も見られるようになり、生徒の興味・関心の向き先が徐々に幅広くなってきているように思われる。しかし、一方で、正直な所、以下のような問題点を抱えて順調に軌道に乗っているとは言い難い面もあるので、方法をさらに工夫をして今後も続けていきたいと考えている。

授業での生徒による新聞記事紹介の問題点

- 読解力の乏しい生徒には記事の読みこなしが難しく、記事の紹介が十分にできないし、感想もなかなか持てない。
- 記事紹介を有益なものとするためには紹介者への事前指導をする必要があるが、現実にはそれを行う機会が持てず、生徒まかせになってしまって有益なものになりえていない。
- 大勢の生徒を前にして発表することに心理的な負担感を強く感ずる生徒やその負担感が理由となって授業へ出られない生徒が出てきた。

② 長期休みの課題「私の新聞記事紹介」

上記のように、大勢を前にしての発表(記事紹介)というスタイルには問題もあるように感じられたので、紹介のしかたの工夫の1つとして、「私の新聞記事紹介」と題する課題を長期休み(年末年始休み)に出してみた。これは、毎日、自宅に届いた新聞の中から気になったり興味を抱いた記事を1件ずつ選び、その部分を切り抜いて台紙に貼り付けるとともに、その記事に対する自分のコメントを付記しておくという課題である。この課題を出すにあたっては、先述のように、読解力の乏しい生徒がいるとの実態や課題の完遂という点を考慮して、生徒へ過度な負担とならないように「切り抜いて貼り付けてコメントを書き添える」という比較的容易に取り組める課題にした。年末年始休みであったので7日分の課題を課したが、その点が効を奏したか、全員の生徒が完遂して提出することができた。書き添えたコメントは、当然のことながら、生徒によってさまざまであり、数行程度の簡潔なものからしっかりと自分の意見を記入したものまであって、生徒の個性が現れているように思え、読んでいて楽しくまた参考になること大であった。この種の課題は、生徒の社会的思考・判断の実態を評価する上でも有益な課題であると思われるので、今後も方法を工夫しつつ継続して課していきたいと考えている。次の頁に載せてある資料は、「私の新聞記事紹介」の実際例である。

一月五日（日）付の　朝日　新聞から

記入日　一月六日（月）

瀬名秀明の 遠めがね 虫めがね

未来に思い巡らす正月の空

2003年は鉄腕アトムが誕生した年として知られているが、同時にライト兄弟がフライヤー1号で空を飛んでちょうど100年。またワトソンとクリックがDNA二重らせん構造モデルを提唱してから50年目にも当たり、ちょっとした節目の年になりそうだ。

正月になると未来の夢が新聞を飾る。私も3年前、元日付の朝刊に未来予測を兼ねたショートショートを書いたのだが、意外とこれが難儀した。

それに比べて昔の人の想像力はパワフルだ。この正月休みは横田順彌の「百年前の二十世紀」（筑摩書房）や、アンドリュー・ワットと長山靖生の「彼らが夢見た2000年」（新潮社）、荒俣宏「奇想の20世紀」（NHK出版）を読み返した。100年前は空前の未来ブームで、当時のイラストを見るとヘンな飛行機械がたくさん出てきて実に楽しげである。

しかし21世紀を生きる私たちは、いまどれほど先まで未来を実感できるのだろう。自分の生活だって、せいぜい数年後のことしか想像できない。未来の長さは時代によってずいぶん伸び縮みするようだ。この感覚の変化はいったい何なのか？

誰も携帯電話の普及を10年前に予測できなかった、だから未来予測なんて不可能だ、と唱える人も多い。むろん未来など予測できない。だが100年前の人たちが空間を上下移動できる飛行社会を楽しんで空想したように、時間の前後に思いを巡らせながら暮らすのは悪くない。背筋が伸びて足取りが軽やかになるような気がするのだ。

いつも変わらないのんびりした正月の青空は、きっと100年後も私たち人間に、未来との付き合い方を教えてくれる。（作家）

記事に対する感想・コメント等

二〇〇三年にはアトム、22世紀にはドラえもん。確かに昔の人たちの想像していた物は私たちには考えつかないようなアイデアばかりだ。それに、私だってせいぜい大学生くらいの自分しか想像がつかない。瀬名さんのいうとうり、昔も今も変わらない青空が私たちに未来との付き合いを教えてくれるように思えた。

(5) 理科での新聞の天気図を活用した学習

理科では、新聞に載っている天気図を切り抜いて気象の学習に活用した。どのように活用したかを聞いていないので詳細については分からないが、想像するに、切り抜いた天気図を活用して、天気図の描き方、約束事、天気図からの読みとり等について習熟をはかったものと思われる。理科担当の職員から「“NIE” 用の新聞を理科の授業で使わせてほしい。」との申し出を受けた時には、理科の学習内容と新聞記事とが頭の中で結びつかなかったが、わけを聞いて、改めて新聞の活用範囲の広さを実感させられ、その他の多くの教科の職員に新聞の活用を啓発していきたいと思わされた。

(6) 国語科学習での季節新聞(壁新聞)づくり

国語科では、昨年度、2学年の3学級で、新聞記事を活用して、模造紙1、2枚大の壁新聞をつくる学習を行った。この取り組み(学習)は、2学年の国語科で本来学習すべき単元の1つとしてあるものでなく、この2学年の3学級の国語科を担当し、なおかつ2学年の学級担任であった2人の教職員のオリジナルの取り組みとして実施されたもので、「新聞離れ・活字離れが進み、新聞や活字から得られる想像力や感性、漢字力、読解力等が乏しくなってきた生徒を少しでも新聞や活字に近づけてそれらの力を取り戻させたい。」とするこの2人の教職員の生徒へ寄せる願いから企画・実施された活動であった。したがって、“NIE” の活動の1つとして意図的に取り組まれたものではなく、結果として “NIE” の活動になったという形である。

「季節新聞づくり」という名前で呼ばれている通り、この壁新聞は各季節ごとに年に4回つくられた。生徒全員が、2，3人ずつグループになって新聞の中から「その季節らしさを強く感じさせられる」という記事を見つけて選び、それを切り抜いて台紙に貼り付ける。たとえば、夏号の新聞づくりであれば、選ばれる記事は、海水浴や避暑地のにぎわい・盆踊り・花火大会等の記事が、冬号であれば、クリスマスや正月にまつわる記事、スキー場のにぎわいや冬山遭難等の記事が多くなるといった具合である。そして、記事の横に自分なりのコメントを書き添える。そうやってできた台紙をさらに大きな紙へ新聞らしいレイアウトのもとに見栄えよく配置して貼り付け、大きな壁新聞をつくりあげるという活動である。3、4回目には、生徒はやり方に慣れ、それほど時間をかけることなくやりおおせてしまった。レイアウト、イラストや配色等の装飾は生徒の創意工夫に委ねられているので、生徒は楽しげにいきいきとして取り組んでいた。

国語科の教職員がこの活動の結果をつけたい力との関連でどう評価しているのか、まだ聞いていないので不明であるが、生徒のようすを見る限り、生徒はこの活動を通して頻繁に新聞と関わりを持つ中で、新聞に対して持ちがちな抵抗感のような感覚から解放されつつあるように見受けられる。

この2人の教職員は、この取り組みをあくまでも昨年度に限定して取り組み、本年度に継続する予定はない(3年に進級し、入試対策面に力を入れるため)とのことであるが、係としては、やり方は異なっても、本年度も新聞を活用した学習活動を展開してもらうよう働きかけていきたい。

(7) 社会科での新聞を活用した授業

社会科では、3年の公民的分野の授業、2年生の地理的分野の授業で新聞を活用する実践を試みた。

① 3年公民的分野の授業での活用例

「地方の政治(地方自治)」の単元の中で、市町村の合併問題を取り上げ、「喬木村は合併すべきか。」を学習問題として授業を展開した。学習問題を設定した後、予想を出して話し合い、調査の観点として、「合併のメリット」、「合併のデメリット」、「住民の意見」、「他の町村の動き」等6点ほどが挙げられ、グループによる追究が始まった。そのうち、「他の町村の動き」を調査するグループが長野県内の町村合併の動きを新聞記事を活用して調べ、長野県の市町村境界線入りの白地図へ、合併問題が浮上し合併の方向に動いている町村を着色して表した資料を作成し発表した。

② 2年地理的分野の授業での活用例

「世界と日本の人口問題」の最後の場面「過疎地」の学習で新聞を活用した。この単元の学習は概ね以下のように進んだが、このうち、第4時の「過疎地での具

第1時	1 世界の人口はどのように移り変わってきたのだろうか。 2 州別の人口はどのように移り変わってきたのだろうか。 3 先進国と発展途上国の人口ピラミッドをくらべてどんな違いがあるか。 4 人口増加の激しい国、少子高齢化の進む国ではそれぞれどんな対応をしているのだろうか。
第2時	1 日本の人口はどのように移り変わってきたのだろうか。 2 地域によって人口のようすはどのように違っているのだろうか。 3 過密地には人口の集中にともなってどんな問題がおこっているのだろうか。
第3時	1 過密地では過密にともなう問題に対してどんな対策を行っているのだろうか。 2 過疎地では人口の減少にともなってどんな問題がおこっているのだろうか。 3 過疎地では過疎にともなう問題に対してどんな対策を行っているのだろうか。
第4時	1 過疎地が行っている具体的な「町おこし」や「村おこし」の例を新聞から見つけてみよう。

体的な『町おこし』や『村おこし』の実際例を新聞から探してみる。」という活動の中で新聞を使った。“NIE” の指定後、本校に届けられた新聞のストックを大量

に教室へ持ち込み、それを生徒個々へ何部かずつ配布して探させた。調べる新聞の量が多い割に関係する情報が思いの他載っていなくて生徒たちはだいぶ苦労したが、それでもほとんどの生徒が「町おこし」•「村おこし」やそれに関連する記事を何とか見つけだすことができた。

教科書の中のことがらは、ともすると生徒にとっては、現実感のない対象になってしまいがちではないかと思われるが、こうして新聞を活用することで多少なりとも教科書の中のことがらを実存感をともなった形で「再認識」させることができたのではないかと自画自賛している次第である。

3．残された課題

(1) 新聞を教育に活用する場合には、指導する者が生徒を新聞に触れさせる前にある程度新聞に載っている情報について知っておく必要があると思われるが、実際にはそれがなかなかできないでいる。そのために、いざ新聞を活用しようと思っても、活用のプランニングが困難な状況があった。

(2) “NIE” を推進する校内体制を作り上げることが難しい。担当者の動き方の問題が大きいと思っているが、担当者以外の教職員の協力をいかに得ていくか、日常の教育活動の中に新聞をいかに組み入れてもらうか等についてなかなか実効あるアイデアや行動を提示できなかった。

(3) 新聞に親しませるには、新聞をつねに生徒の近くに有るようにし、頻繁に触れさせていくことが必要であると考える。そのために、何も学習のためだけでなく、遊び道具やゲームのネタとして等、「こんな使い方もできるんだ。」と生徒が驚きを持って目を見張るような使い方を提示できるよう柔軟な形で新聞を生かしていく術を模索してみたい。

生徒が「町おこし」、「村おこし」の例として新聞から見つけだした実際の記事

2002年12月13日（金曜日）

社会科地理的分野作業
こんなことをしているぞ！

長野県、ローソンと提携

スキー客減少に歯止め

来月からバス共同運行

県は志賀高原などの有力4スキー場をモデル地区に指定して活性化を進めている（志賀高原高天ガ原スキー場）

長野県とローソンのスキー観光事業での提携が決まった。民間企業との効果的な連携によって県内スキー場の利用客の減少に歯止めをかけるのが県側の狙いだ。ローソンに限らず、長野トヨタ自動車（長野市、宇都宮元社長）、小賀坂スキー製作所（同市、小賀坂道邦社長）などとも誘客活動で提携するほか、飲料大手とも提携交渉を進めている。（企業面参照）

長野トヨタなどとも組む

田中康夫知事は首都圏などから県内スキー場に誘客するには、都市に根付いているコンビニエンスストアと組むのが最適と判断。知事は大手のローソンに的を絞って十月中旬に東京都内で新浪剛社長に会い、提携を申し入れた。現在、提携の具体的内容を巡って詰めの交渉を行っている。

ローソンも県との提携が販路拡大に有効になると計算しているようだ。第一弾として、バス事業を行う松本電気鉄道（松本市、滝沢徹社長）の協力を得て、一月からスキーバスを県と共同で走らせる。ローソンの店舗で割引リフト券や、県スキー振興のキャラクター商品を販売することも検討している。

県は長野トヨタや小賀坂スキーとは誘客活動で提携する。スキー場を訪れた客を対象に抽選でプレゼントを贈る誘客活動を行う計画で、長野トヨタは自動車を、小賀坂スキーはスキー板などを提供する。スキー場を巡るスタンプラリーの実施も予定しており、飲料大手などとの提携交渉を進めている。

民間企業との提携内容の具体的な実行は、県が十月に県内企業などと共同で設置した組織「スキー王国長野誘客推進協議会」（会長・北野次登北野建設社長）が行う。

長野県には百を超えるスキー場があり、北海道に次いで多い。しかし、二〇〇一年度のスキー客は一千万人強で、一九九二年度のピーク時の約半分と大幅に落ち込んでいる。

県は、ヒット映画「私をスキーに連れてって」の監督の馬場康夫氏らを迎えて「スキー再興戦略会議」を設置するなど、長野観光の軸となるスキー場の振興を目指している。

2003年1月8日（水曜日）

2年　組　番　氏名

県内スキー場 客足戻る

サービス改善策などで格差

長野県内のスキー場に客足が戻ってきた。年末年始を中心とするシーズン序盤戦を終え、多くのスキー場の利用者数が前年実績を上回った。降雪の多さが主因だが、スキー場のサービス改善策も功を奏したとみられる。特に中央自動車道沿いのスキー場の健闘が目立つ。旅行会社によると、温泉などの付加価値がつくスキー場に人気が集まり、集客力の格差が広がっているという。

スキーやスノーボードを楽しむ客でにぎわう志賀高原のスキー場

白樺湖を中心とする中央自動車道沿いのスキー場で利用者数が伸びている。子どもがそりで遊ぶ専用ゲレンデを設けるなどサービス・施設面の改善を進めるスキー場が目立つほか、ビーナスラインの通行料無料化なども効いたもようだ。

志賀高原や野沢温泉といった老舗スキー場の客足も堅調だ。スキー以外の新しい楽しみ方を提供し始めたほか、県のスキー場振興重点地区に指定されたことを契機に、サービス面の拡充を進めている。温泉があることも人気を高めている。

白馬は例年よりも雪が早く降ったことを追い風に、多くのスキー場でシーズン累計の利用者数を増やした。ただ、「一部のスキー場を除き、年末年始以降の客足は鈍っている」（リフト会社幹部）という声もある。

客足は戻ってきたが、日帰り客も多く、宿泊客の動向はまだら模様だ。日本旅行の担当者は、「スキー客の県内宿泊取り扱いは前年比で一－二割増えており、特に、白樺湖周辺と温泉地の人気が高い。一方、経営改善が遅れているスキー場や施設の取り扱いは減っており、人気の差が広がっている」と指摘する。

JTBの調査では、首都圏からのスキー宿泊客は減少している。新幹線の延長に伴って東北地方を訪れる客が増えたうえ、「長野県から利便性が高い上越や草津に流れるケースが多い。名古屋からの客は増えているが、全体では前年比でマイナス」と分析する。

長野県内スキー場の利用客は一九九二年度をピークに減少傾向だ。県はスキー再興戦略会議を設置し、二〇〇二年度のスキー場利用者の前年比プラスを目指している。今シーズンの滑り出しは好調だが、「天候に頼らずに安定的に客を増やすには地道な経営改善が必要だ」（JTB）という声は少なくない。

主な県内スキー場の利用者数の対前年同期比

スキー場名	年末年始	今シーズン累計
＜上信越自動車道＞		
志賀高原	3％増	1％増
野沢温泉	3％増	5％増
軽井沢プリンスホテル	前年並み	前年並み
戸　隠	微増	1割増
斑尾高原	2％増	7％増
＜白　馬＞		
白馬八方尾根	微減	3割増
白馬岩岳	微減	1割増
栂池高原	5％増	2割増
＜中央自動車道＞		
ブランシュたかやま	10％増	25％増
しらかば2イン1	4％増	13％増
開田高原マイア	3割増	1割増
おんたけ	6％増	増加
乗鞍高原温泉	13％増	増加

（注）リフト会社や地元市町村など調べ